平成２１年７月の解説（週間天気予報）

【７月の天候状況】

上旬は、北日本から西日本にかけて前線や低気圧の影響で曇りや雨の日が多く大雨となったところもありました。中旬は北日本では低気圧が次々と通過したため雨の日が多く、大雨となったところもありました。東・西日本では旬中ごろは太平洋側を中心に晴れましたが、旬始めと終わりに前線と低気圧の影響で大雨となったところがありました。下旬は前線が本州付近に停滞し九州北部と中国地方を中心に、北日本から西日本の各地で大雨となりました。月を通して南西諸島は太平洋高気圧に覆われ、おおむね晴れました。

月を通しての日照時間は南西諸島以外で平年よりかなり少なくなり、7 月の月間日照時間の最小値を更新したところがありました。降水量は北日本で平年よりかなり多く、東・西日本では多くなり、北海道地方を中心に月降水量の最大値を更新したところがありました。一方で、南西諸島では少なくなりました。気温は北日本で平年より低くなり、南西諸島では高くなりました。

【７月の検証結果】

「降水の有無」の適中率（3～7 日目の平均）は全国平均では例年(注)より 9 ポイント低く 56%でした。ほぼ全国的に例年より低くなり、特に東北、東海、近畿、中国、四国地方では 11 から 16 ポイント低くなりました。最高気温（2～7 日目の平均）の予報誤差はほとんどの地方で例年並みとなり、全国平均は例年より 0.1℃小さい 2.5℃でした。最低気温（2～7 日目の平均）の予報誤差は、北日本から中国、四国地方で例年より 0.2 から 0.6℃小さくなり、全国平均では例年より 0.3℃小さい 1.5℃でした。

（注）例年値は気象庁ＨＰ（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【７月の週間天気予報から】

7 月下旬は、南海上から湿った空気が流れ込みやすく、短時間に強い雨の降る日がありました。

21 日から 22 日にかけては、前線が一時的に関東地方まで南下した影響で雨が降りました。その後、前線の影響は弱まりましたが、湿った空気が流れ込みやすくなり、晴れ間の広がる時間帯もあるものの雨も降るという不安定な天気の日が続きました。

週間天気予報の作業では、湿った空気が流れ込む影響で大気の状態が不安定となり、雨が降りやすくなる状況は把握していましたが、日々の予報の中では雨を予報できなかった日が少なくありませんでした。

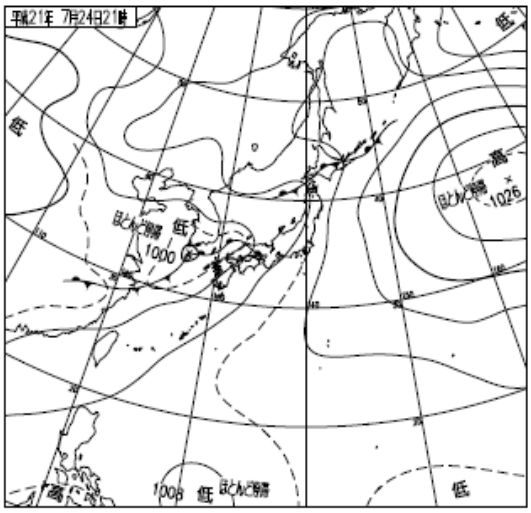

図１．7 月 24 日 21 時の地上天気図

24 日は、日の射す時間帯もありましたが、関東地方の広い範囲で雨が降りました。山沿

いを中心に短時間に強い雨の降ったところがあり、午後は東京の大手町でも雷を観測しました。図１は 7 月 24 日 21 時の地上天気図です。

この日に東京地方に雨が降ると予報できたのは、3 日前の 21 日になってからでした。この日を予報したときに使用した予想図を図２に示します。湿った空気が流れ込むところでは、大気の状態が不安定となり雨が降りやすくなりますが、湿った空気が流れ込む先やその程度の予想が日々微妙に変化するために、関東地方にどの程度影響を及ぼすかを正確に見積もることが出来ず、結果として 19 日や 20 日の時点では予報に雨をつけることができませんでした。

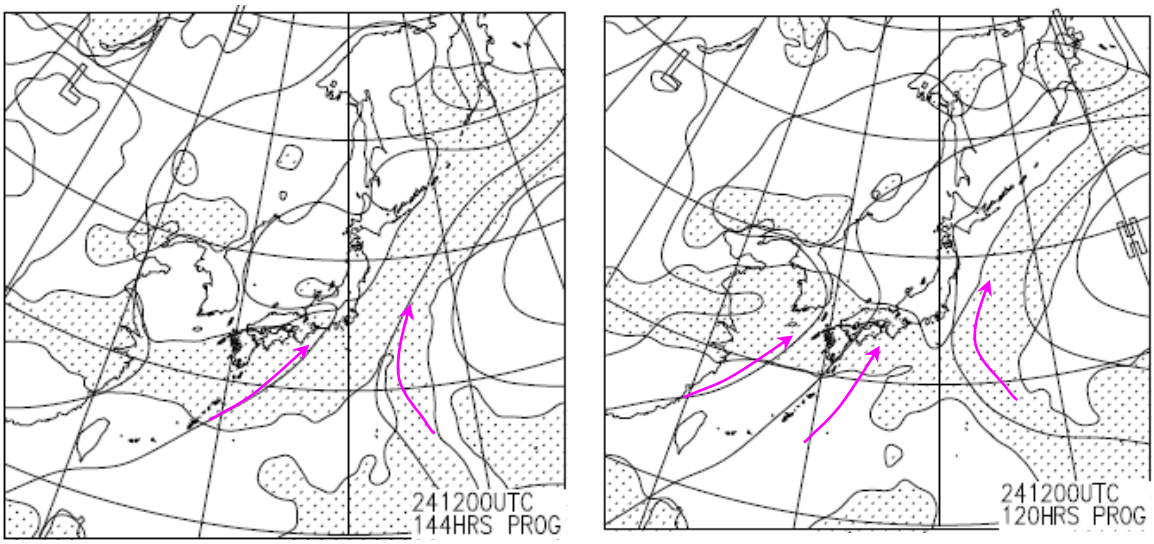

図２．週間天気予報の作業で使用した 24 日を対象とした予想図
左図は 19 日、右図は 20 日に予報を作成するときに使用した予想図。
水玉模様は、降水が予想される地域を表す。
図中の矢印は、湿った空気の流れ込みの予想を示す。

大気の状態が不安定となる状況が予想できても、実際に広い範囲で雨が降るかどうかを数日前から予想することが難しかった事例です。梅雨前線の影響が弱まった後も安定した夏型の気圧配置となるまではこのように大気の状態が不安定で、天気が複雑に変化することに留意して、予報文〔天気予報の図柄〕だけでなく、降水確率や信頼度、天気概況などを合わせて日々チェックしていただきながら、できるだけ最新の予報を利用下さるようお願いいたします。

【９月の週間天気予報の利用にあたって】

太平洋高気圧に覆われる日が多い８月に比べて、９月は低気圧や前線が日本付近を通りやすくなります。低気圧が発達しながら通った後には、北の冷たい空気を持った移動性高気圧に覆われるため、晴れても日中の気温は 8 月ほどには上がりにくくなります。また、晴れた夜は放射冷却現象の効果が強まって翌朝の最低気温が下がりやすく、内陸地方の特に盆地で顕著になります。夏の暑さから開放されてすごし易くなりますが、暑さになれた身体にとっては、急激な気温の変化は体調を崩す原因ともなります。週間天気予報では、天気の他に最高気温、最低気温の予報も行っていますので、体調管理などの参考としてもご利用下さい。